



SINCE 1901 感謝と希望を  
日本女子大学・創立100周年

# 図書館だより

## 目次

### 本を借りて読む

貸し本屋から公共図書館へ(前篇)	出淵 敬子	1
「今、学生にすすめる本」特集(その3)		
室 俊司	堀越 栄子	2
麻原 美子	喜安 朗	
新保 満	星野 信也	3
入江 宏	酒井 彦一	
展示「十八世紀の浄瑠璃正本」について	浅野 三平	4
福田陸太郎氏の偉容 著作集刊行によせて	新井 明	5
NACISIS-Webcat の使い方	高野真理子	6
CD-ROM「PsychLIT」の使い方	浜口 都紀	7
平成11年度夏期スクーリング開館について	中澤 啓子	8



## 本を借りて読む

### -- 貸し本屋から公共図書館へ -- (前篇)

出淵 敬子

少し古い話だが、オランダのヴァン・デン・プリंकという出版人が1968年「読書、貸し出し、購入の習慣」に関する国際的調査報告を発表した時、本を借りて読む習慣が優勢な国の1位はイギリス、2位はトルコ、3位はオランダであった。逆に買って読むほうが優勢な国はフランスだったという。日本のことは出ていないが、おそらく買って読む人の方が、借りて読む人を上回るだろう。日本人には愛書家も多いし、好きな本、必要な本を借りるのでなく、できるだけ手元に置きたいと願う人が多い。狭くて本の置き場所に困りながらも、本とともに暮らしていると落ち着いた気分になることは確かだ。

ひるがえってイギリス人の本を借りて読む習慣は、少なくとも幾分かは18世紀から19世紀を通じて盛んだった貸し本屋の存在に負っているのではないかと思う。

イギリスの貸し本屋は1725年詩人のアラン・ラムゼイがエディンバラに開いたのに端を発し、その後、徐々に保養地や地方都市に普及し、1821年にはイギリス全体で1500もの貸し本屋があったという。ゴシック・ロマンスで有名なミネルヴァ・ライブラリーが、ジェイン・オースティンの生まれた年(1775年)に始められ、女性読者の間にゴシック・ロマンスを流行させた。それをオースティンが『ノーサンガー・アベイ』で諷刺したと言うのも、もとはと言えばオースティン自身が小説や、ロマンスを買うばかりでなく貸し本屋からも購読していたからにほかならない。当時のゴシック・ロマンス流行に一方でのめり込み、他方でその迷妄を批判していたというわけである。

19世紀の貸し本屋と言うとすぐ思い浮かべるのはミューディである。1842年彼は年会費1ギニーと引き換えに主として中産階級の読者達に、小説、詩、ノンフィクションなどをブルームズベリー地区の文房具店の一角で貸し出し始めた。高価な本を買うよりも1回1冊なら何回でも借りられて、年会費も同業の店に比べ割安だったミューディの店は、急速に発展し、ロンドン市内のみならず、バーミンガムやマンチェスターにも支店ができ、地方にも本が配達された。新刊書はミューディによって大量に買い占められ、最盛期にはミューディの蔵書は750万冊、会員数は二万五千人とも、五万人とも言われている。現在は各地の支店で文房具・ペーパーバックの本を売るW・H・スミスも、19世紀半ばには貸本屋だった。小説の読者層は貸本屋の隆盛につれて拡大していったのである。

(図書館長・英文学科教授)

## 「今、学生にすすめる本」特集（その3）

**室 俊 司**（児童学科教授）

40年を越える歳月、「教育とはどういうことか」を考えつづけ、学生諸君にも問いかけてきて、終始、私の手もとにある本といえば、『フランクリン自伝』（岩波文庫）とジャン・ジャック・ルソーの『エミール』（岩波文庫）である。もちろん、『エミール』は教育学や児童学をやる人だけでなく、多く人が一度は読んでみようと思う本にちがいない。そして、20年ほど前からは、黒沼ユリ子さんの『メキシコからの手紙』『メキシコの輝き』（各々・岩波新書）、神谷美恵子さんの『こころの旅』『編歴』（各々・みすず書房）が加わって、私の座右の書は6冊になった。これらの本はいずれも、子ども時代をのびやかに過ごし、青年時代に「人間、何のために生きるか」を自問自答し、歴史上の人物をふくめて、いろいろな人との“出会い”を通して“共に生きる”という人間信頼への可能性を探究してきた“人生の記録”である。何度読んでも、新しい発見がある。

**堀 越 栄 子**（家政経済学科助教授）

最近ばたばたしている私に、お薦め！知人が訳しました！この本買って！とこころやさしき友人たちから届いた4冊の本。独り占めはもったいない本ばかり。個人への深い洞察から時代をとらえ、丁寧に本質に近づき、この手に握れそうな知恵と勇気がプレゼントされる。「集合行為」が1つのキーワードであるアルベルト・メルツ『現在に生きる遊牧民（ノマド） 新しい公共空間の創出に向けて』（岩波書店、1997年）。「ケア」にアプローチする鷲田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』（TBSブリタニカ、1999年）。レイフ・クリスチャンソン『あなたへ』第1～14（岩崎書店、1995年から99年）は、スウェーデンの学校教育における「オリエンテーリング科」の副読本として出発した絵本。この本は、入院中の友人に贈りました。そして、河村ふみ『わがままな女は幸せになれる』（フェミックス、1999年）を読んで、電車の中で吹き出さないように。

**麻 原 美 子**（日本文学科教授）

**ラリーサンダース著（杉本卓訳）『本が死ぬところ暴力が生まれる』** 新曜社 1998年

本書には「電子メディア時代における人間性の崩壊」という副題がつけられており、電子メディア時代の現代に対する強い警告の書であるといえる。著書サンダースは、銃による殺人を快楽として無差別殺人に走る若者が増大するアメリカの現実に強い危機感を抱いて、その原因を言葉と文字を失って電子メディアの仮想現実のイメージに振り回された結果、自己を認識することができなくなったからだと指摘する。こうした危機的状況を阻止するためには言葉と文字の世界を取り戻す教育が今後なされねばならないことを強調して、その第一歩は母親が乳飲み子を胸に抱いて呼びかける慈愛に満ちた発話から始まり、その声を通して豊かな口承文化の世界が語られる必要をとく。その言葉が人間の知覚を目覚めさせ人間性を培うからで、この段階を経て識字への移行がスムーズに行われると言うのである。電子メディアが子守をしているわが国の現実をみると、対岸の火事として安閑としてはいられないことを痛感するのである。戦慄をおぼえる衝動的無差別殺人に走る人間を生み出さないために、本書の強い警告を受け止めるべきであると考えて本書を推薦する。

**喜 安 朗**（史学科教授）

高校2年の時に読んだ、大塚久雄著『近代欧洲経済史序説』の一冊は、歴史学への私の関心をかき立てた最初の本として忘れ難いものです。この著書は、ヨーロッパの「近代化」が、17世紀イギリスの農村での、独立自営農民の広汎な形式を出発点とすることを論じたもので、現在でも『大塚久雄著作集』（岩波書店）に収められています。私は何よりもこの本での整然とした論理展開に感銘を受け、歴史がこのように明確な論理で解説できるのかと驚いた次第です。

当時（1948年）私は高校で世界史の授業を受けていましたが、教科書は出版されておらず、一年上級のクラスでは、『共産党宣言』をテキストにしていたような時代でした。そうした中で、授業とは関係なく読んだこの本の印象は、きわめて強烈でしたから、私も自分自身の方法をもって、歴史を研究したいと思うようになりました。

**新保 満** (現代社会学科教授)

**丸岡秀子** 著 『ひとすじの道』(第1～3部) 偕成社文庫 1985

私の通年コースをとった学生には、全員に同じ本を6冊読ませ、それぞれの本の読書レポートを提出させた。後になって、OGが女子大時代の思い出話に花を咲かせる時、「最も印象が深く、読んでおいて良かった」というのがこの本である。本書は中学生を読者に想定している。小説の体をとっているが、著者の自伝と考えるとよい。日本の近代化が開始され、都市のブルジョアは富裕化するのに、農村と農村から都市に流出した者とは窮乏化する。その矛盾の中で、右翼も左翼も農村の貧困問題に関心を持つ。結局、農村出身の職業軍人が主導権を握り、日本は国粹的排外的傾向を強め、遂に15年戦争に突入してゆく。その時流の中で農村に生きた女性の姿が活写されている。戦前の日本女性の苦悩を知るのに好適。

**星野 信也** (社会福祉学科教授)

**森嶋通夫**先生は、日本の大学の経済学の枠に入りきれないままイギリスの大学に移られ、そこに永住されている。かねてイギリスをはじめ諸外国との国際比較の立場から日本に関する著書も多い先生が、『なぜ日本は没落するか』(岩波書店、1999年)という挑戦的な新著を出版された。そこで21世紀半ばを予測する方法とされたのが、長期予測には無力な経済学に代わって、そのころ日本の支配層となっているであろう現在の若者たちのおかれた「教育」環境から予測するというものである。その舌鋒はまことに鋭い。大学から教養課程を取り去れば2年で済むはずを、4年制を維持したため、大学は狭隘な領域の授業が競合してレジャーランド化し、その機能を喪失してきた。没落から脱却する道は東北アジア共同体しかないが、大戦中にヨーロッパ大陸を救ったイギリスとEUの関係と違い、日本は大陸諸国を侵略したという歴史を正しく清算しなければならないと説く。

**入江 宏** (教育学科教授)

**中村敏子** 編 『福沢諭吉家族論集』(岩波文庫) 岩波書店 1999年

表題は家族論集となっているが、女性論、教育論も多く収められている。たとえば、明治11年に発表された「教育の事」を読むと「学校はいらぬ子供のすてどころ」という警句が目にとびこんでくる。『学問のすすめ』を引きあいに出すまでもなく、福沢は近代学校の重要性を認識し、これを推進する先頭に立った人物であるが、その彼が明治10年代に入ると、早くも、今日という学校依存の風潮が出てきたことを敏感に嗅ぎとっていた。福沢の周辺の「上等社会」では大切な家庭における人格形成をないがしろにして、『餅は餅屋』の例を引き、「病気に医者あり、教育に教師ありとて、七、八円の金を以て父母の代人を買入れ、己が荷物を人に負わせ」て得々としている手合いが現われた。これでは「学校はあたかも不用の子供を投棄する場所」ということになり、さきほどの警句が出る。とくに、人間社会学部や家政学部の皆さんにおすすめしたい。

**酒井 彦一** (物質生物科学科教授)

**中村祐輔** 著 『遺伝子で診断する』 P H P 新書 1996年

分子生物学の講義をしていてどうも不十分な気がしてならないのは、私どもの身近な問題としての健康が分子生物学的に重要な問題であるにも拘らず、基礎的な遺伝子問題にかかずりあってなかなか学生の皆さんに、応用面の、例えば、がんの分子生物学など基礎的理解が届かないじれったさがある。その意味で、中村祐輔さんの書かれた「遺伝子で診断する」は、絶好の読ものとして皆さんに一読を推薦したい。この本は、「ゲノム」と呼ばれる「生命の設計図」を理解するにはうってつけの書といえる。中村さんとは東大理学部時代に大学院で何年かをご一緒し、色々お世話になった。たいへんやさしい方で、この本の随所にそれを感じ取ることが出来る。理学部の学生さんのみならず、現代に生を受けたすべての人たちが、病気と遺伝子との関わりについて理解をふかめることは、これからの日本にとってたいへん重要なことと思われる。

## 展示「十八世紀の浄瑠璃正本」について

浅野 三平

100周年記念工事のすぐ隣りが、築後35年になる本学の図書館である。その図書館の前の石段を昇り、正面にある朱塗りの回転ドアを開けると、小規模ながら立派な展示室になっていて、大きなガラスケースが二つ置かれている。

何時ごろからか、ここへ日本文学科が系統的に展示をするようになっていた。多分、3・4年前の和歌文学会の折に、古代文学の資料が並べられたのが最初であろう。翌年が中世文学で『平家物語』などが展示されていたのを覚えている。順番から言えば、去年が近世文学なのだが、ちょうど今年の六月に、日本女子大学で日本近世文学会が開催されることになっていたのだから、これに合わせて近世の展示を少し延期して貰っていたのである。

かねがね私は、近世文学で展示するなら「丸本」つまり正確に言えば「浄瑠璃正本」しかないと思っていた。それは、かなり以前に前島春三氏より本学日本文学科に寄贈されていた丸本が、実に310余部も存在しており、これなら展示しても学問的であり、専門家の評価にたえられるだろうと思っていたからである。

折もよく去春から西生田の文化学科に、歌舞伎専攻の服部幸雄教授が着任された。その秋の西生田での会議の際、丸本の目録を持参して氏の研究室を訪問し、展示の相談をした次第である。今春の卒業式のとき渡されたお手紙には、「これは珍しいんじゃないかなと思われるものを、とくに江戸浄瑠璃に注意しながら選んでみました」とあり、40部近く 印が目録につけてあった。さらに「18世紀後半の浄瑠璃正本」とすればよいとのご教示も受けた。さて、選んでいただいた丸本を、いかに陳列するかが大きな問題になった。内容別とか作者別とか、いろいろと考えられたが、最後は成立年代順に並べることに落ち着いた。

後日、日本近世文学会でも必要になるので、5月の連休に馴染めないワープロを使い、40部近い稀少価値のある浄瑠璃正本の、題名・刊行年代・種類・作者名などを印刷し、書名や作者名はさらに原本と照合して正確を期したのである。

日本文学科の助手に手伝って貰いながら、図書館玄関ホールに展示を始めたのは、5月31日曜日の午後のことであった。享保10年(1725)の『南北軍問答』から、寛政11年(1799)の『唐土織日本手利』までの37部を陳列したのである。鍵のかかるガラスケース3個にうまく並べ得たものの、ケースの上に解説を貼る板があり、かなりのスペースなので、用意していたものだけでは、相当の空白が生じた。そこで2・3日してから、カラーコピーの人物写真などと一緒に、急遽書いた解説文を加えた次第である。何でもやってみないと分からないと言うが、本当にそうであった。ちょうどその頃、国立劇場で開催していた『大江巳之助展』が大変参考になったこともつけ加えておきたい。

さて、展示が開催されてから、本学の教職員・学生にもかなり見ていただいたが、何といても6月19日(土)がすごかった。学会の研究発表後に多くの人々がきて立錫の余地もないほどであったと、後で館員からうかがっている。

夏休みに入る直前に、展示品を片づけながら、「いいものがある」と専門家に誉めて貰ったことを思い出し、本学にも学問的価値の高い書物が、かなり所蔵されていることに、意を強くしたのである。

(日本文学科教授)



図書館玄関ホール展示 平成11年5月～7月

## 福田陸太郎氏の偉容 - - 著作集刊行によせて - -

新井 明

福田陸太郎氏の著作集全7巻(沖積舎)が1999年3月に完結した。各巻は「比較文学」、「イギリス文学」、「アメリカ文学」、「詩と詩論」、「随筆・紀行」、「講演・対談」、「英語文化」の順となっている。これだけ多岐にわたる分野にペンを走らせることが、はたしてできるものであろうか、といふかる向きがあるかもしれない。しかし、巻をひもとけば、どれにも良質のエッセイ、論考の類が並んでいるのである。なにしろ敗戦後、半世紀余がすぎた現在でも、氏ほどの活躍の跡をとどめた文学者は、この国には見あたらない。それだけに、じつは10年ほど前から準備が進められた今般の著作集が、どうまとまるのか、いささか気になるところであったが、全7冊を並べてみると、氏の活躍の全容が、ほぼ見える思いがする。

評者はいま、「ほぼ見える思いがする」と書いた。ということは、これは全集ではないということであって、氏の大事な仕事のなかで、すっぽりと抜けている部分があるということである。たとえば1952年という早い時期に氏がパリで出版した中川与一『天の夕顔』の仏訳をはじめ、英米仏の詩や小説の邦訳の類は、ことごとく除外されている。全7巻の著作集に仕上げるために、著者はたいへん苦勞をされたことであろう。

福田氏はたんに机上の議論で事足りりとする学者ではなかった。文字どおり世界を股にかけて歩いては、各所に教えを垂れてきた。文化使節の姿で訪れた国の数、おそらく30をくだるまい。その最初は1938年に東京文理科大学在学中に、マニラで開かれた日比学生会議に、その翌年にはロスアンゼルスで催された日米学生会議に、それぞれ日本代表のひとりとして出席している。(後者の会議では宮沢喜一氏、磯野富士子氏らがいっしょであった。)そのような背景があればこそ、戦後の「比較文学」はこの国では福田氏にあって、初めて国際的な幅をもつ専門分野になりえたのである。

どこで何を語ろうとも、氏にはつねに一貫した姿勢があった。その第1は、文芸のデーモンに憑かれての「旅人」であったということ。第2は、氏の胸には頼れゆくものへの哀惜の念がひそんでいるということ。これらは総じて日本の美意識の基本に通ずる諸相であろう。そして第3は、氏の散文はそれがルポルタージュであっても、つねに詩であることを目指し、じじつ一編の散文詩となっている場合が多いのである。その傾向は年経るごとに、深まっていった。代表例ひとつを挙げれば、1983年の国際ペンクラブに日本代表として参加したおりの「サンマルコ広場のほとりにて」であろう。もうひとつ、「<ショート・ストーリー> アンナ」を見てみよう。これは全体が散文の作品なのだが、最後は「塔のある漁港」という詩に収斂し、締めくくられている。これなどは「万葉集」あたりの、長歌と短歌の関係の現代版とみていいものだ。氏は根は詩人なのだ。(本著作集第4巻に収められた詩作品をご覧いただきたい。)

氏は勲三等旭日中綬章(1981年)を受けられた。最近も日本文化振興会から、平成11年度国際芸術文化章を授けられた。これなども、福田氏の文章が一般にもよく読まれている証しであろう。

アメリカの詩人ウォレス・ステイヴンズの「吼える風に」の福田訳

声に張りのあるきみよ、  
きみは遠い眠りの場所で、  
どんな音調をさがしているのか?  
いってごらん。

訳詩にも福田氏の声ははいっている。氏自身これからも、「張りのある」声をあげて、高々とあげて、「美」の旅人ぶりを発揮されることであろう。まだ「眠りの場所」など、遠い先々のことだ。

(英文学科教授)



## NACSIS-Webcat の使い方

### < NACSIS とは >

文部省学術情報センター National Center for Science Information Systems の略称で、「学術情報の収集、整理及び提供並びに学術情報及び学術情報システムに関する総合的な研究及び開発を行なう事を目的として、昭和61年4月に設置された大学共同利用機関です。」と、そのホームページ <http://www.nacsis.ac.jp/nacsis.index.html> に説明されています。探している資料が本学に見つからなかった場合、NACSISは強力な手段となってくれます。

「Webcatとは、全国の大学図書館等が所蔵する図書・雑誌の総合目録データベースをWWW上で検索できるシステムです。この総合目録データベースは、学術情報センター（NACSIS）がサービスしている目録システム（NACSIS-CAT）を通じて、参加館が共同作成しているものです。目録システムの参加館では、順次、総合目録データベースに蔵書を登録しています。」現在、700近い大学等の図書館の所蔵が一気に検索できる優れたものです。図書館のホームページからNACSIS-Webcatへは、学外サーバーを選ぶと、学術情報センターへの入口が用意されています。

### < 検索のウラワザ >

それぞれシステムごとに索引語の設定などが違いますので、NACSISのこれを知っていればという要点を挙げておきます。（詳しくはオンライン上の「利用の手引き」をご覧ください。）

- ・検索語を空白で区切って複数指定すると、それらの論理積（AND）になる。論理和（OR）検索はWebcatではできない。
- ・検索語は、できるだけ多く指定した方がヒット件数が絞り込めるため検索時間が短い。
- ・該当する資料は、200件までしか表示できない。
- ・前方一致検索を行なうには、検索語の末尾に「\*」（アスタリスク）をつける。但し、1文字に\*をつける事と、出版年の項では使えない。
- ・日本語の場合、単語を空白で区切って入力するか、冒頭から分かるところまで入れて、後ろに\*をつける。著者名の場合も姓名の間に空白を入れる。（西洋人著者名の場合は原綴り）例)宮本 美沙子  
但し、出版者は全体で一語とする。例)岩波書店
- ・洋資料の場合、冠詞、前置詞等は指定しない。また、ウムラウトやアクセント等の音標符号は、とったかたちで指定する。

### < 重要！ >

ところが、最近では、本学にあるか確かめずに、他大学の図書館に行きたいので紹介状を書いて欲しいとか、いきなり直接相手の図書館に行ってしまうというケースが目立ってきています。便利になった分だけ、利用の際のマナーも心得ておきましょう。

1. 本学図書館のホームページからNACSIS-Webcatへの入口の前に、蔵書検索ページへのアイコンが用意してあります。必ずOPAC（1990年以前の図書と和雑誌は、カード目録も）を検索して、学内の所蔵を先に調べましょう。（実は、NACSISには本学の所蔵はまだほんの少ししかデータを送っていないのです。NACSIS-Webcatで日女大と出てこなくても、所蔵していることがよくあります。）
2. 他大学の図書館にお世話になる場合、必ず本学図書館参考係に相談してください。図書・雑誌それぞれで、紹介状を発行する、文献複写依頼をする、相互貸借で借りる、公開されている専門図書館を探す、本学でも購入するなど、ケースによっていろいろな方法をとることができます。

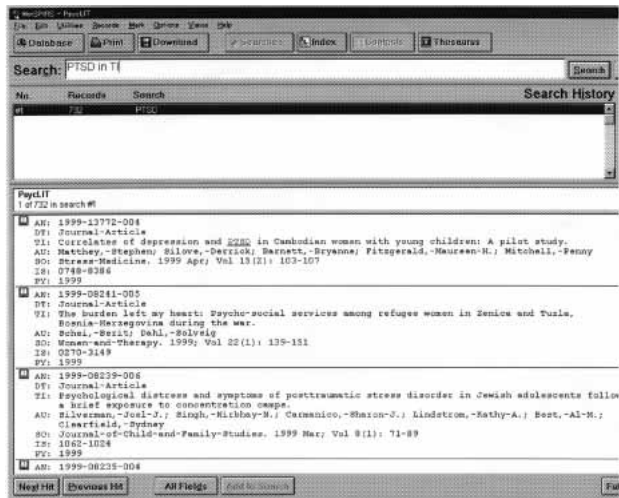
（館員・参考係 高野真理子）



## CD-ROM「PsycLIT」の使い方

今回はAPA(アメリカ心理学協会)の作成するデータベース、PsycLITをご紹介します。これはPsychological Abstractsおよびその前身であるPsychological Indexをデータベース化したもので、1887年以降の心理学およびその境界領域に関する文献のデータが、年代別に全6枚のCD-ROMにおさめられています。

右図の一番上のボックスが、検索語を入力するところです。まずは、このボックスに探している論文に関係がありそうなことばを入れてみましょう。最後に\*(アスタリスク)を付けると前方一致検索になり、複数形と単数形を同時に調べたいときなどに便利です。では、PTSD(post traumatic stress disorder)について書かれた論文を探してみましょう。ボックスにPTSDと入力して、



右側のSearchボタンを押します。大文字、小文字は意識しなくても大丈夫。このとき、複数の単語でかけあわせをしたければ、単語の間に“AND”をいれて同時に入力することもできます。単語間には他にもOR, WITH, NEARなどを使うことができますが、ここでは詳しく説明している余裕がありません。それぞれの働きについては、マニュアルをご覧ください。

検索語を入力するボックスの下に検索結果が表示されました。この図ではわかりませんが、検索キーとして使った言葉は赤い色で表示されています。

画面左側のアルファベット2文字は、フィールドをあらわします。例えば、TIは論文のタイトル、LAは論文が何語で書かれているかを示しています。(フィールド名の一覧はUtilitiesの中のFields to searchからみることができます)このフィールドを利用して、結果を絞ることもできます。たとえば先ほどの検索で、「論文のタイトル中にPTSDという言葉を含むものだけがほしい」という場合、“PTSD in ti”と入力すれば良いわけです。

冊子版のPsychological Abstractを使ったことのあるひとなら、「データがずいぶん簡単なんじゃないか」と思われるでしょうが、これはBrief Fieldといって、簡略な表示をしているためです。詳しい形式で見るなら、画面左下のAll Fieldボタンをクリックしてください。アブストラクトも含めた詳細なデータが表示されます。また、この結果は検索をすべて終了するまで保存されますので、検索結果を更に絞り込みに使うこともできます。“Smith in au”でSmithさんの書いた論文を検索しておいて(結果 3)先ほどの検索結果である 2とかけあわせれば(2 and 3と入力)Smithさんの書いた、タイトルに“PTSD”を含む論文が探せるわけです。

検索の流れを追っただけで紙数が尽きてしまいました。シソーラスや論理演算を利用した詳しい検索ができる一方で、今回ご紹介したような自由語による「乱暴な」検索でも一定の結果を出せるのが、このデータベースの便利なところです。西生田キャンパスでは他にSSI(Social Science Index)という社会学分野のCD-ROMも所蔵していますが、こちらもほぼ同じような手順で検索することができます。「説明が英語だし、難しそう」と敬遠している方も、ぜひ一度体験してみることをお勧めします。なお、このCD-ROMは現在、図書館内の特定のコンピュータでしか利用できません。ご利用を希望されるときは、参考係までお申し込みください。

(館員・西生田図書館 浜口都紀)

## 平成11年度 夏期スクーリング開館について

中澤 啓子

今年の夏の暑さは特に厳しく、スクーリング生の皆様はご苦労様でした。大変だったと思います。また今年は集中豪雨・台風による死亡事故なども次々に起こりました。大学図書館でも豪雨による浸水が原因で、学習室・リスニングブース・1F洗面所を閉鎖せざるを得ない日もあり、激しい雷雨があると図書館員も館内を隈無く見回る習慣がつかしました。忙しく見回る館員と、一心不乱に勉学に励んでいるスクーリング生の姿はとても対照的でした。

今年はスクーリング受講者が3000人を切り、受講者数の減った昨年よりもさらに100人少ない2902名でしたが、入館者数・複写枚数などすべての数字が昨年度を上回りました。特に、1F雑誌フロアの入室者が増えました。複数のスクーリング生にいきなり「学術雑誌をください」と囲まれ、館員もたじろぐ場面もありましたが、講義が進むにつれて資料名も特定され、対応もスムーズにいききました。夏期スクーリングに対して図書館側も利用を予測できるものは前もってカウンターに備える等と努力もしておりますが、本学で所蔵していない資料が参考文献に挙がっていて、スクーリング生から入手方法を相談されることや、講義中に先生が紹介した資料を1番めの利用者が1週間借りてしまい、講習終了までその他の多数の利用者が利用できないことがよくあります。その場合、類似図書を案内していますが、授業で引用されたものや先生から指定された章を読まなくてはならない等には、お応えできません。地方からの受講者が本学図書館以外から図書を手に入れようと言うのは大変なことです。先生方の中には、課題の参考文献を挙げるために、前もって図書館の蔵書を調べていらっしゃる方もいます。図書館でも、通学生の指定図書のような形で限られた資料をより多くの学生に提供する方法なども検討したいと思います。また、今回も参考文献に記載された書誌事項に間違いがあり、資料を探すのに手間取ることもありました。より、効率よい学習のために先生方との連絡を密にしていけるよう、通信教育部と協力しつつ、何かしら方策を採っていききたいものです。

例年図書館を悩ませる切り取り本は3件ありました。スクーリング貸出の延滞督促は現在も継続中で、延滞督促はがきを送付する手間や金額も大変なものです。盗難事件は1件で、机上にロッカーキーを放置したのが原因でした。延滞と盗難には、スクーリング生だけでなく、他の利用者の方にもくれぐれもご注意いただきたいと思います。

(館員・閲覧係)

## 夏期スクーリング開館の利用状況

年度	11	10	9
開館日数	30	30	30
入館者数	16,784	15,441	17,674
1日平均	560	515	590
最高	699	646	753
最低	412	364	429
受講者数	2,902	3,014	3,411
登録者数	1,097	1,062	1,223
1日平均	37	36	41
貸出冊数	5,490	5,199	6,386
1人当たり	5	5	5
1日平均	183	173	213
最高	325	268	322
最低	86	98	121
貸出日数	30	30	30
複写枚数(2F)	67,269	64,553	73,208
1日平均(2F)	2,243	2,152	2,441
複写枚数(1F)	16,228	15,125	17,829
1日平均(1F)	541	515	594
一般学生・教職員その他の貸出	2,262	1,992	2,494
1日平均	76	66	83

## 参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	11(15)	10(15)	9(22)
一般学生・教職員	77	67	167
スクーリング生・その他	51	49	64
合計	128	116	231
1日平均	8.5	7.7	10.5

**編集後記** 今号も8名の先生方より「すすめる本」を寄せていただきました。福田陸太郎先生は、1982～83年に図書館長を歴任されています。巻頭のカットは、この7月より西生田図書館で奮闘中の矢吹さより館員による。梟の作品収集はご家族の趣味で、大きな梟はイタリア製、小さな梟はフランス製とのことです。(田口)